

長尾支部の紹介

支会長 十河 博

長尾地区は、南北に長く、その中に北より南へ一本の廻路道があります。この道を通って昔より多くの廻路がこの地を訪れ、色々な文化を残してくれました。その文化の影響を受けた人々によって、長尾支部の活動が支えられています。

さぬき市文化協会が発足して二年余りが過ぎ、やっと本部活動と、支部活動・部門活動が、三者一体と成って動き始めたと思います。長尾支部の参加団体は、美術部門に九団体・音楽部門に十三団体・芸能部門に五団体・文学芸部門に五団体・生活部門に十三団体の合わせて四十五団体、会員数は六百十余名です。会員は、長尾公民館を中心に、他の公的施設などで、部門団体ごとに活動しています。

その成果を市民の皆様に表示するための文化祭が、台風災害のため、今年中止となりました。私達会員一同残念でなりませんでしたが、でもその中から、地区の婦人会・商工会青年部・食生活改善クラブ等が、私達文化協会と共に立ち上り、災害チャリティの文化祭が開催出来ました。文化協会会員達も、積極的に参加しました。

また、今年度も小学生を対象にした「土曜いきいきスクール」を開講しました。これは毎月一回、土曜日にパソコン・絵画・書道・里山歩き・卓球・太鼓・舞踊の七スクールに七十名程の児童が参加し、各指導者のもとに体験学習をしています。

その他、昨年実施しました会員の一日研修旅行を、今年も三月下旬に「大阪城」と「大阪歴史博物館」及び、神戸の「人と防災未来館」の見学を予定しています。

また、会員は市本部門の開催する発表会や展示会に積極的に参加し、他の支部の人達と交流する事により、より高い目標を目指して、学習と技術の向上に励んでいます。県内外の発表会や交流会に参加している団体もあります。

市民の皆様、私達長尾支部には、皆様の生涯学習に合ったサークルが必ずあると思いますので、是非参加されますよう、お待ちしております。そして文化協会の活動が、市民の皆様の豊かな生活に少しでも役立つ事が出来ましたら幸いと思っております。

長尾陶芸クラブ

安田 彰

長尾陶芸クラブが、設立されて二十数年になると聞いていますが、当初の設備は電動ロクロが一台と他はすべて手作りの作陶だったと聞き及んでいます。当クラブは、行基苑「からぶろ」の近くで、白山を正面に見る丘の上、社会福祉の里に位置し、春は桜、梅雨の頃には紫陽花と四季を通して大変すばらしい風景が望めるところです。

現有設備は、関係各位のご理解と決断の賜物であり大切に活用させて頂いています。電動ロクロ八台を設置し、その他の備品も完備されており設備としては、申し分のない施設が整っています。

このような立派な環境で会員各位は、信楽・萩・備前等と数種の土を買入れ陶芸の伝統に拘束されない、自分流の作品造りに積極的に取り組んでいます。

ただ制約と云えば、温度の千二百三十度に耐えられる粘土と釉薬です。当クラブの特徴は、作陶に没頭できる好条件のもと自作品に対する批判はなく意見を求めれば助言は行い、従って指導者のいない自由な発想で創作活動を展開しています。

毎週水・土曜は成形、木・日

曜は削りの仕上げと、週四日の行程で活動しています。

陶芸には釉薬が微妙に変化する事によって味わい深い美しい器が作られるのですが、釉薬のかけ方一つをとっても作品に表われ、温度管理も、さらに、重要な条件です。

素焼きから、釉かけ、本焼きとなりますが、本焼きも約十五時間位を有し、窯出し時にはどんな作品に焼けているか全員が一喜一憂の心境で窯を開けるのですが、他の作品と違って、陶芸は一旦窯詰めを終えると、点火から終了まで、温度計に頼るしか方法がなく、陶器の奥の深さを痛感するものです。

作品展も昨年五月四日から、市文化協会展覧会、七月五日長尾郵便局ホールでの展示会と、一年間を通じて活動の成果を、地域住民と愛好者の交流を図り、地域文化の向上とより心豊かな地域社会に資するものです。

さらに、今後の課題は、山積していますが、(一)地域に密着した活動の展開、(二)現有施設の有効活用から入会者の促進等、高令者対策の一環として発足した以上、その対応も現在は低調に推移していますが、愛好者諸氏の御意見を拝聴し、活動に生かしていきたいと思っております。

先進地視察研修に参加して

長尾支部 白井路子

朝晩の冷え込みが、だんだんと厳しくなり、初冬を思わせる十二月七日、さぬき市文化協会視察研修会に参加させていただきました。その日は、前日の晴天がうそのような小雨まじりの肌寒い一日でした。

楽しいガイドさんと一緒に瀬戸大橋を渡り、午前中は、岡山県北西の新見文化交流館・生涯学習センターの見学です。

中国山脈を望み高梁川上流の新見川沿いに位置するその建物は、ちょうど中央に階段があり両面ガラス張り、解放感に満ちていました。近くに、新見市役所・消防署・警察署・社会福祉センターがあり、JR新見駅から近く、この地域社会に密着した場所でした。一階部分は一〇〇〇席収容できる大ホール、そして三〇〇席のイベントホ



▲新見交流館の緞帳（平山郁夫氏画）